国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成28年12月1日発行　第40巻第12号通巻第471号

月刊みんぱく

2016 12月号

特集
人類学における映像

人類学的営みにおける映像の今　川瀬慈
学術メディアとしての映像の課題　飯田卓
民博スタイルの民族誌映画　寺田吉孝
映像で学ぶコミュニケーションリテラシー　南出和余
民族誌映画の「創造的劇化」　分藤大翼

映像民俗学事始め

北村 皆雄

一九七四年、社会人類学の野口武徳、民俗学の宮田登、ドキュメンタリー映画監督の野田真吉と私の四人で「映像民俗学を考える会」を作り、四年後の七八年に「日本映像民俗学の会」として正式に発足させた。「映像民俗学」という言葉を使ったのは多分日本で最初だろう。「学会」としないで「学の会」としたのは、宮田さんのこだわりで、研究者だけでなく誰でも参加でき、地域の生活や文化を記録、享受できる会にしたいという考えからだ。発起人の三人はすでに鬼籍に入り私だけが残っているが、多くの研究者や映画人、一般人らが新たに加わり、来年で四〇周年を迎える。毎年日本のどこかに出かけて行き、その地域の映像特集を組み、論議する。来年三月は松本市浅間温泉の神宮寺で「死者と生者の通い路」をテーマに、日本やアジア・アフリカの死と葬送儀礼、他界観を描いた映画を特集する。

欧米では一九七〇年代以降、映像人類学が風靡して数多くの映画が作られたが、日本ではカメラを持つ研究者は少数だった。学問が細分化・専門化して、人間の営みをトータルに見ることを忘れたように私には思えた。人間をビヘイビア(行動)としてとらえ、生活、風土、環境を含めて描くことのできる動画は、研究者にとっても大切な道具ではないだろうか。

私は映画やテレビ番組を作ることを生業にしてきた。沖縄や東北など日本の他、韓国、中国、インド、チベットやヒマラヤ、黒潮文化圏と地域を絞って取り組んで五〇年になる。それぞれの生活の根っこを明らかにしたいと思ってやってきた。人の営みの古層を捉えておけば、時代が経っても古くはならない。むしろ価値が出ると考えてきた。

神の島といわれる沖縄の久高島では、一九六六年から撮影をしている。二二年に一度行われるイザイホーを始め、年中行事の三〇以上を撮ってきた。白衣を着て島中の女性が参加していた行事はここ十数年で壊滅状態になっていった。このままではいけないと、一台のパソコンに全行事・全映像を入れて島に寄贈しようと、研究者と一緒に続けている。とりあえず六〇時間、五三〇〇カットに文字情報を入れて、観られるようにしてお渡しした。毎月一回の上映会に来るお年寄りは若き自分の姿を見、亡くなったお婆たちを思って涙した。初めて行事を見る若者たちは、島のアイデンティティーはここにあると喜んでくれた。映像民俗学、映像人類学はこれからだ。

プロフィール
1942年長野県生まれ。映画監督、映像民俗学者、早大アジア研究所招聘研究員、一般社団法人日本映像民俗学の会代表、ヴィジュアルフォークロア代表。映画「久高島」「見世物小屋」「修験」「ほかいびと」「冥界婚」。TV「チベット大河紀行」(NHK)「チョモランマの渚」(TV朝日40周年記念)。プロデュース作品でギャラクシー選奨、放送文化基金本賞。著作『俳人井月――幕末維新風狂に死す』(岩波書店)。

月刊 みんぱく

12月号目次

1 エッセイ 千字文
映像民俗学事始め
北村 皆雄

特集 人類学における映像

2 人類学的営みにおける映像の今
川瀬 慈

4 学術メディアとしての映像の課題
飯田 卓

6 民博スタイルの民族誌映画
寺田 吉孝

8 映像で学ぶコミュニケーションリテラシー
――大学教育の現場から
南出 和余

9 民族誌映画の「創造的劇化」
分藤 大翼

10 ○○してみました世界のフィールド
ドイツのポップカルチャー市場調査――2日目
山中 由里子

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
ピカロン
八木 百合子

16 文化遺産おもてうら
「東西文化の交流点」で
――ロシア連邦ボルガル遺跡を巡るポリティクス
櫻間 瑛

18 手芸考
インドの「ハンディクラフト」
金谷 美和

20 ながなんぢゃ
「ラフラン諸島」ってどこ?
山本 泰則

21 次号予告・編集後記

特集

人類学における映像

映像の撮影・制作は、人類学においてもひとつの有用な手法となっている。アカデミズムにおけるその最新の動向と位置づけや、調査地での撮影者／被撮影者の関係性、大学教育におけるメディアリテラシー、そして民博が独自に制作してきた民族誌映像などより、映像の役割や可能性を探る。

マイクのスポンジを用いて調査者を撮影するポーズをとる少年。『Room 11, Ethiopia Hotel』（川瀬慈監督作品、2006年）冒頭のシーンより。
エチオピア、ゴンダール

人類学的営みにおける映像の今

川瀬 慈（かわせ いつし）
民博 文化資源研究センター

観察と解説

人類学における映像実践のひとつとして、映像による民族誌、民族誌映画が挙げられる。民族誌映画は文化事象の記録や分析、保存をはじめ、異文化理解のツールとして研究や教育現場において利用され、研究を広く社会に還元する手段としても活用されてきた。

例えば、二〇世紀の民族誌映画の系譜を俯瞰（ふかん）してみよう。その様式に関しては、対象の〝客観的な〟観察に徹する観察型や、テクストやボイスオーバー（画面に登場しない話者による語り）による論述・解説を軸とする解説型が中心であったといえる。研究者／制作者と被写体間の相互行為を基軸に展開するスタイル、あるいは演技を主体とする実験等も挙げられるが、これらが主流であったとは言い難い。

人類学は参与観察をその中心的な調査方法として掲げてきた。そのため、研究者／制作者が、映像に収められた出来事には関与しない観察者を装い、映画のなかではその存在をあからさまに出さないという映画様式を好んできたことはごく自然なことなのかもしれない。解説型のなかには、国立民族学博物館のビデオテークや研究映像にみられるように、プロのナレーターによる対象についての俯瞰的な視点からの解説を軸とし、そこに映像が組み込まれる作品がある。解説型の様式において映像は、テクストによる解説やアカデミックな論述を立証する資料に位置づけられるのである。

開かれる民族誌映画

そのようななか近年、人類学における映像をめぐる認識論の転換、カメラや編集機材を含む技術革新、メディア環境の大きな変化等にともない、民族誌映画の制作方法や様式が多様化している現状がある。人類学者による研究作品の国際的な上映と討論の場となっている民族誌映画祭を見渡すと、多様な試みがなされていることがわかる。そこでは、研究者／制作者がカメラの前の出来事の参加者となり、被写体の人びとと日常会話を交わし、意見を交換する姿が描かれる。あるいは、対象の人びとの民族誌的情報のみならず、調査者の想いや心情の吐露が、ボイスオーバーによってなされることもある。今まで、どちらかといえば敬遠されてきた研究者／制作者の主観や感情が前景化され、同時代の人として被写体とともに生きる現実が映し出される。それにとどまらず、被写体の人びとに、日常生活や過去の出来事を再演してもらう等、演出や表現の次元の開拓が盛んにおこなわれている点も指摘できる。近年各国を席巻（せっけん）した、ハーバード大学の感覚映像民族誌学ラボによる試みも無視できない。圧倒的な音響によって構築されたその作品群は、視覚偏重の人類学映像への鋭い問題提起に他ならない。観察型や解説型のアプローチは、学術的な映像の話法として必ずしも絶対視されず、人類学的営みにおける多様な映像実践のひとつとして相対化される傾向にある。人類学における映像は、研究者の感覚や感情、あるいは表現、演出といったキーワードを軸に大きく開かれつつあるのである。

こうした動向をふまえ、民族誌映画の国際的な論壇と呼応した活動をおこなう人類学者が増える傾向にあり、概して人類学における映像実践の機運が日本においても盛り上がりをみせているといえよう。山形国際ドキュメンタリー映画祭や、東京都写真美術館・恵比寿映像祭において、国内外の研究者による民族誌映画の特集がおこなわれたことも記憶に新しい。映像の方法論をめぐり、人類学、映画界、コンテンポラリーアートが領域横断的かつスリリングな交流をかつてない勢いで展開させつつもある。そのようななか、人類学的営みにおける映像とは何かが、改めて大きく問われているのである。

梅棹忠夫初代館長が隊員として参加した京都大学アフリカ学術調査隊の第二期（一九六三年四月から六五年三月）には映画班が派遣され、日本ではじめてアフリカを舞台とした映像取材がおこなわれた。写真は映画班が使用していた大和号。タンザニア、マンゴーラ。国立民族学博物館所蔵。撮影・富田浩造

学術メディアとしての映像の課題

飯田 卓（いいだ たく）
民博 先端人類科学研究部

梅棹忠夫と映像メディア

みんぱく初代館長の梅棹忠夫先生（以下、敬称を省略させていただく）が亡くなる以前、テレビ番組の異文化表象を研究していたわたしに対して、次のように問いかけられたことがあった。

「映像メディアは、学術のツールとしてほんとうに信頼できるものだろうか」。それ以来、わたしはこの問題について考え続けている。

暫定的な結論を述べるなら、映像メディアは二〇世紀末時点で信用に値しなかったが、機器と技術が発達した現在、使いかたによってじゅうぶん信頼（あぶ）できるようになってきた。しかも、映像で溢れかえる現代社会との関係を維持していくうえで、学術的な映像活用の方法は、むしろ積極的に改良していかなければならないとさえいえる。

すべての学問に独創が求められることはいうまでもない。その独創について、梅棹は『情報論ノート』で次のように述べている。

［さまざまな実験や観察によって大量の］データがつくりだされる。そのデータの大部分は情報としてはあたらしいものであろう。しかしその大量のデータのなかから、独創的な学説がいつもでてくるとはかぎらない。この大量のあたらしい情報、すなわちデータ群にいっきょに秩序をあたえる原理をみつけだすこと、これは独創である。独創とは、情報群にひとつの統合原理をあたえるものである。

このように述べたあとで、論文を書く研究者だけが独創にたずさわるのではなく、それを秩序だててひとつの書籍にまとめる編集者の仕事もまた独創であると、梅棹は述べる。そして、あらゆるメディアコンテンツの製作や舞台芸術、造形芸術、言語芸術も同じ意味において独創であり、梅棹はそれを情報創造とよびかえている。つまり梅棹は、学術と芸術、デザインをかなり近い営みとしてとらえていた。ちなみに梅棹は、『裏がえしの自伝』のなかで「わたしは映画製作者」というエッセイも書いている。

このような親近感にもかかわらず、梅棹は、映像製作への不信を著作のなかでも述べている。その直接のきっかけは、梅棹の調査地では撮影しないという条件で梅棹が情報を提供したにもかかわらず、ある映画監督がその約束に背いて映画撮影を敢行したことにあるようだ（似たような経験は筆者にもある）。しかしそれだけでなく、特にテレビ映画の場合、時間的な制約が大きいにもかかわらずシリーズものにすると内容にまとまりがなくなってしまうことや（『裏がえしの自伝』）、放送が終わったらしばしば参照できなくなってしまうこと、それにともなって真偽や作為性がうやむやになってしまうこと（『国立民族学博物館研究報告三一巻二号』）を指摘している。論証の手がかりにできないからには、思想表出の手段には適さないというわけだ。

氾濫する映像のなかで

しかし、すぐれた民族誌映画を見ていると、自分では体験しえない視点から事実が描写され、まさにそれゆえに世界認識にあらたな秩序がもたらされたと思うことがある。これを学術と無関係な芸術的営為とみなし、「虚構にもとづいた秩序構築」と両断するのは早計ではないか。

参照性と論証性に関していえば、放送電波や映画館を使わずに映像が公開され、オンデマンドで視聴できるようになった現在、いつでも参照できるように映像をストックしておくことはふつうになっている。問題なのは、DVDやMPEG、YouTubeといったメディアがちがうと、内容も微妙に異なる場合があることだ。劇映画だと、言語によって内容を変えていることもある。これを避けるためには、学術的な引用に適したバージョンを適宜視聴できるような手段を整える必要があろう。また、論文のページ数に相当するような、引用箇所を指定する慣習も確立していかねばならない。

時間的制約もまた、メディアの多様化によって消失しつつある。なによりも大きな近年の変化は、集団製作の必要がなくなり、製作コストが安くなったことだろう。個人がみずからの関心に応じて作品を作るようになれば、問題関心の幅が広がるだけでなく、著作責任が明確になる。梅棹が遭遇したような道義違反も少なくなっていくにちがいない。もちろん、特定の製作者の作品を学術的な見地から評価するシステムも、整えていかなければならない。

残る問題はただひとつ。筆者には映画をたくさん見る時間がない。論文なら飛ばし読みもできるが、映像作品に関してこの問題を解決するすべはないものか。

民博スタイルの民族誌映画

寺田 吉孝（てらだ よしたか）
民博 民族文化研究部

雨のなか、農作業を撮影する取材班。フィリピン、ルソン島バルバラサン村、二〇〇八年。写真撮影・ウソバイ・カダー

民博では、開館後間もない一九八〇年に民族誌映画の制作が始まった。これまでに制作された番組は約六〇〇本。このうち、四五〇本ほどの番組を専用のブースで視聴することができる。これらの番組や配信システムはビデオテークと名付けられ、民博の顔のひとつとして長年来館者に親しまれてきた。

これだけ多くの映像番組を作ってきたのだから、世界の文化をバランスよく紹介するために、マスタープランに沿って取材の地域やテーマを決めてきたと思われるかもしれないが、じつはそうではない。原則として、教員が自身の研究や関心に基づいて映像取材の提案を個別におこなってきたからだ。研究の積み重ねがなければ、映像取材は成り立たないから、この方針は至極当たり前のことかもしれない。展示の内容をより詳しく紹介するために映像番組を作ることもあるが、その場合にもテーマの選択は研究の蓄積に基づいている。

また、映像資料の収集は、番組を作るためだけではなく、後世に残すべき資料を収集し保管するという博物館の大きな責務と連動していることもこの背景にある。つまり、制作する番組には使わなくとも、記録として収集する価値のある映像資料は積極的に集めてきた。

自前で番組を作る

近年、高性能の映像機器が比較的安く入手できるようになったため、予備調査から撮影・編集まで、番組制作のプロセスをすべて一人でやってのける研究者が増えてきた。しかし民博の設立当時は、機材が高価なだけでなく、使いこなすには高度な知識や技術が必要だったので、ごく一部の例外を除けば、研究者が独力で映像番組を作るのは至難の業だった。それならば、教員と映像の専門家がひとつのチームとなり、取材や編集ができるような体制を作ればいい。そう考えた初代館長の梅棹忠夫は、映像取材や番組編集などを年度予算に組み入れ、館内にスタジオや映像の編集室を設置した。このサポート体制ができたおかげで、民博の研究者は世界各地で映像資料を収集し番組を作ることができるようになったのだが、梅棹のパイオニア精神溢（あふ）れる功績は案外知られていない。

映像の専門家とのチームワーク

では、民博の映像番組は実際にどのように作られているのだろうか。教員は、取材のテーマを決め、現地での撮影のコーディネート、インタビュー、ときには通訳等を担当するのに対し、撮影隊は、実際にカメラをまわし、取材後には教員とともに編集作業をおこなう。撮影は分業制をとっており、国内取材は民博の専門職員だった田上仁志さん、海外取材は制作会社の井ノ本清和さんが担当した。お二人とも草創期から民博の映像関連の事業やプロジェクトにかかわってきた大ベテランである。長年さまざまな教員と共同で映像取材を担当してきた経験から、研究者それぞれの視点を良く理解してくれていた。取材ごとに大まかな打合せをするが、現場で撮影チームに細かい指示を出す必要はなく、番組を編集する段になると、教員が伝えたい内容がより効果的にビューアに伝わるように、番組作りのプロとして適切な助言をしてくれる。このような協働の蓄積から、民博番組に共通するスタイルのようなものが作りだされていったのかもしれない。

民族誌映画の職人、井ノ本さん

わたしも、民博の番組制作システムの恩恵に浴してきた一人である。海外での取材が多かったので、井ノ本さんたちとチームを組むことが多く、七カ国で計一〇回の取材をともにした。常日頃から映像やわたしの研究テーマである音楽芸能に関する議論をしていたので、現場での撮影を安心して任せることができる頼もしいパートナーだった。今年一月にも一緒にネパールに行ったばかりだったが、井ノ本さんはこの取材中に体調を崩し、五月には驚くほどの早さで帰らぬ人となってしまった。民博の民族誌映画にはさまざまな評価があるだろうが、井ノ本さんが果たした役割は大きい。民博への長年にわたる貢献に対して感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

撮影中の井ノ本清和さん。どんな現場にも自然体で溶け込む能力は見事だった。フィリピン、ルソン島タブク市、2008年。写真撮影・ウソバイ・カダー

桃山学院大学国際教養学部2013年度卒業制作作品『堀町だんじり～別れと新たな出会い～』（宮本彰子・空山加奈子作、21分32秒）

映像で学ぶコミュニケーションリテラシー
――大学教育の現場から

南出（みなみで） 和余（かずよ）
桃山学院大学 准教授

メディアを読み解く力

グローバル化が進行する現代社会において、情報の流通は人びとの移動をはるかに上回るスピードでなされている。特にインターネットの発展にともない情報の発信者が一部の専門家に限られなくなると、錯綜（さくそう）する情報をいかに読み解くかという能力「メディアリテラシー」が必要とされる。さらに、デジタル化によって映像は一般の人びとも容易に手にできる記録表現媒体となった。そうしたなか、大学でも一部の映像専門家を育てるためだけでなく、自ら映像制作を経験することで、メディアの構造、映像の力や暴力性、さらには映像による表現方法を学ぶことが、広く一般に推奨されるようになった。筆者は映像人類学の立場から、ここ七年ほど、大学における映像教育に携わっている。

民族誌映画とは「関係の鏡」

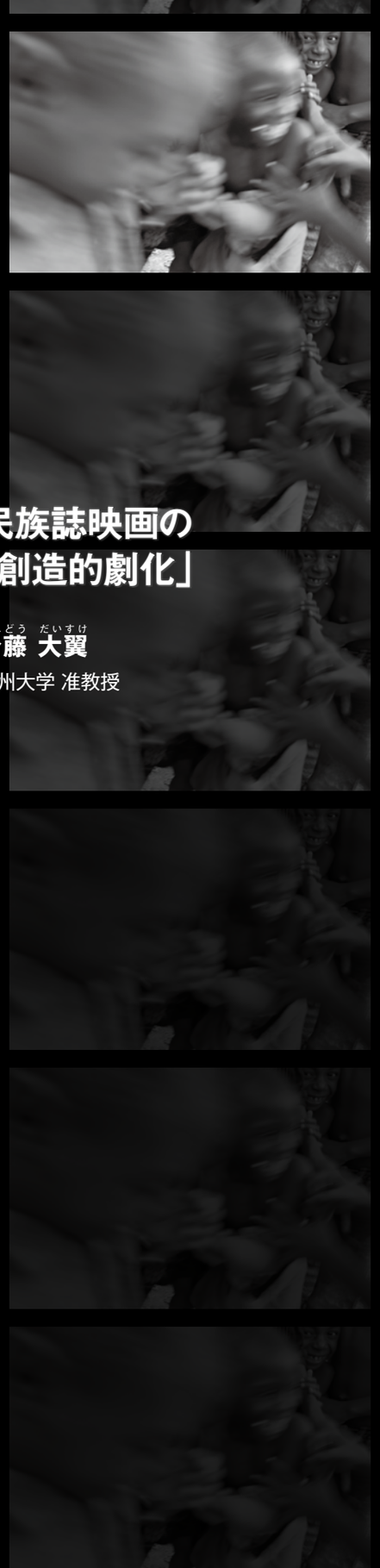
映像制作には企画、撮影、編集という三つのプロセスがある。基本的には人類学者が、テーマを決めて既存の情報や研究を収集し、フィールドワークに出かけ、収集した情報をもとに民族誌を書く過程と変わらない。あえて「民族誌を書く」ことと「民族誌映画を作る」ことの違いをあげるならば、映像の場合、撮影していない事象は後から作品に反映させることはできないということだろう。したがって、企画の段階で綿密な調査をし、そこにある事象を丁寧に撮影し、より映像に忠実に民族誌（映画）を組み立てることが求められる。

また、人類学者にとって調査対象者との関係が生命線であるのと同様に、映像制作においても被写体となってくれる相手との出会いと関係が鍵となる。相手と自分のあいだにカメラが存在することは、「あなた」と「わたし」の個の関係のもとで展開される交渉が記録として残り、ひいては公になることを暗示している。相手は「わたし」を受け入れるだけでなく、共有された瞬間がカメラを介して記録され、公開されることをも受け入れてくれるのである。

こうした映像制作を通じて経験的に学びうるものは、撮影や編集の技術以上に、被写体となってくれる相手に受け入られること、相手と向き合うこと、そこで自らも得る気づきや共感である。作品に映し出されるのは、「文化の鏡」であるだけでなく「関係の鏡」でもある。

コミュニケーションを豊かに

コミュニケーションの手段が多元化し、わたしたちの生活に直接間接的に影響をおよぼす関係が世界規模に広がるなか、映像人類学は、オフラインからオンラインに至るまで、自らの立場（位置）を明らかにしたうえで他者を理解するという本来のコミュニケーションのあり方を再確認させる。それはまさに、コミュニケーション手段を身につけるためのリテラシー教育だといえよう。



民族誌映画の「創造的劇化」

分藤（ぶんどう） 大翼（だいすけ）
信州大学 准教授

参加型映像制作

近年、人類学における映像制作のスタイルは多様化しており、調査者による調査者のための制作と、被調査者による被調査者のための制作を両極として、そのあいだでさまざまな映像が作られている。前者の例が民族誌映画の典型的な制作スタイルだとすると、後者のスタイルの例として挙げられるのが「参加型映像制作（Participatory Video）」である。

それは、ある人びとが自らが抱える課題を映像化することを通じて、現状を見つめ直し、事態の改善に取り組むきっかけを得るというものである。参加型映像制作は、一九六〇年代なかばのビデオの誕生とともに始まり、二〇〇〇年代以降、研究者だけではなく、調査機関や政策担当者、アクティビストなどのあいだで急激に関心が高まっており、世界各地で実践されている。

筆者も、二〇一一年からカメルーン共和国において、狩猟採集民バカ（Baka）という人びとともに参加型映像制作に取り組んでいる。そして、バカ社会の窮状を訴える内容の映像作品を制作してきた。制作には現地の研究者や映像作家にも参加を依頼し、打ち合わせ、撮影、編集、上映、討論という過程で、人びとが協同する機会を作ってきた。

詳細については別稿を参照してもらわなければならないが、上映と討論を重ねるにつれて、課題も明らかになってきている。特に、集落で上映した際のバカの人びとの反応が芳しくないのである。社会の問題が次々と指摘され、困惑する人びとの姿が描かれているのだから無理もない。やはり人びとが楽しむことができて、活発な議論が起こる作品を作る必要がある。そこで次に筆者が計画しているのが「劇映画」の制作である。

協同でシナリオを

劇映画といっても、劇場公開を目指すようなものではない。あくまでも人類学的な研究をもとに現地の人びとと、その暮らしを描く映画である。その上で重視するのが、シナリオの作成である。人類学者が対象社会のことを充分に理解しているのであれば、現地語でさまざまな場面のシナリオが書けるはずである。けれども正直なところ、それはまだ筆者には難しい。だからこそ、バカの人びとと協同してシナリオを作成することが調査・研究にもなる。そして、人びとに役柄を演じてもらって撮影し、映画化する。

現地の人びとが視聴して、まさに自分たちが生きている世界が描かれていると認めてくれるようなものができれば、調査者と被調査者という関係も越えて、両者にとって発見に満ちた民族誌映画が誕生したということになるのではないだろうか。

○○してみました世界のフィールド

ドイツのポップカルチャー市場調査――2日目

山中 由里子（やまなか ゆりこ）
民博 民族文化研究部

コミコン・ジャーマニーに潜入してみました（後編）

ドウジンシを「熟覧」する筆者

ドイツ、シュトゥットガルトのコミコン（コミック・コンベンション）をさらに掘り下げて調査するため２日目も会場へ。そこで出会った同人誌作家の女性２人が、日本マンガへの熱い思いを語ってくれた。

正直、一日目で疲れ果て、コミコン会場であるシュトゥットガルト・メッセに戻る気力と意欲は失せていた。ちょうど、市内のリンデン博物館で「日本の印籠」展をやっていたので、「今日は古き良き、小さき日本の工芸品を静かに鑑賞したい……」と朝食を食べながらしみじみ思った。しかし、前日は会場の規模に圧倒され、またコスプレの物珍しさに気を取られ、全体像をつかむのがやっとであったので、もう少し掘り下げて調査せねばと気を取り直した。

コミコンの看板

ターゲットをさだめ

二日目にして場に慣れてきたこともあり、会場ホールの四方がバルコニーに囲まれていることに気が付いた。そこに上がり、混みあう会場を見下ろしてみると、フィギュアが詰まったおもちゃ箱のようだ。仮設の壁でゾーンが区切られているのがよくわかる。前日には見過ごしていたが、過激な抗議活動で知られる某海洋保護団体もなぜかテントを出している。海賊みたいだからか？　地球を救うヒーローだからか？

ともあれ参加者の話が聞きたかったので、出品者が一番暇そうにしている作家コーナーに向かうことにした。作家といってもプロではなく、いわゆる「ファンアート」や独自の作品を展示して、小物を売っているアマチュアの絵師さんたちである。コミック系、マンガ系、イラスト系と分類されているようだ。日本だったら中学生レベルかなという絵を出している人もいれば、プロ並みの筆の人もいる。みな、カリカリとスケッチブックに絵を描くことに没頭しているので、話しかけやすい雰囲気ではない。

ドウジンシ発見

とあるテーブルで〝DOUJINSHI 8.00€〟の文字が目に留まった。B5サイズほどの薄い「ドウジンシ」をぱらぱらめくってみると、男性同士の愛を題材とした「ボーイズラブ」のジャンルの作品だ。出品者のおねえさん二人は携帯型ゲーム機で遊んでいたが、こちらに気づいてニコッとしてくれたので、「ひとつの作品だけの冊子もドウジンシってよぶんだ。日本では同人誌は何人かの作家さんたちの作品を集めた雑誌のことだけどね」、と知ったかぶりをしてみた（私の同人誌文化理解が非常に時代遅れのものであるということは後日知ったが、会話のきっかけは作れた）。彼女らは特にアートの学校に通ったわけではなく、マンガが好きで自己流で学んだという。「ボーイズラブのジャンルが専門なの？」と聞いてみると、「ヤオイとか、今流行ってるから。でもファンタジーとかも描いてみたい」と、特にこだわりはないようだ。「やおい」（ヤマ無し、落ち無し、意味無し）の概念が浸透していることにも驚きである。

二人は共同で作品を作り、ドイツ各地のブックフェアやマンガ・アニメ専門のイベントに作品を展示してきたらしい。「今回はテーブル代はタダだけど、ライプツィッヒのブックフェアなんて二五〇ユーロもとられた」。そんなに高いブース代で元がとれるのか心配になったが、「コンホンなんかで結構お金が入るのよ」という。Con―honとはコンベンションの「コン」と日本語の「本」を組み合わせた造語で、ファンがもってきた画帳にイラストを描いて、一〇～二五ユーロほどお金をもらうシステムになっている。日本のコミケで「スケブ」（＝スケッチブックの略）とよばれることも後日知った。

マンガの描き方入門書

アメコミとマンガの力関係

日本人は味方とみなしてくれたのか、彼女らはマンガの位置づけがコミックに比べて低いことをしきりに嘆く。ドイツのポップカルチャー市場の力学においては、マーベル、DCなどの「アメコミ」がやはり圧倒的に上位にあり、「西洋のコミック、東洋のマンガ」が西高東低の位置関係にあるようだ。コミコン参加者のあいだでもマンガは「目が大っきくって、胸がでっかい」というイメージで、変態か子どものものと蔑まれているという。「マンガはもっと奥が深いんだって、知ってもらいたいの」。来日したことのない彼女らの知るマンガは、日本のマンガ文化の氷山の一角なのだろうが。

インタビューに応えてくれたアイスとシオン

★ドイツ、シュトゥットガルト

企画展
「津波を越えて生きる ――大槌町の奮闘の記録」

岩手県大槌町の被災前の文化を紹介すると同時に、被災直後の人びとの行動や復旧の試みを展示の形でたどります。将来起こりうる大規模災害に対する備えの必要性を示し、災害を乗り越えて過去から未来へと文化や伝統をつなぐことの意義を考えます。

会期　2017年1月19日(木)～4月11日(火)
会場　本館企画展示場

大槌まつりの手踊り隊

年末年始展示イベント「とり」

2017年の干支をテーマに、みんぱく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「とり」を紹介します。

会期　12月8日(木)～2017年1月24日(火)
会場　本館ナビひろば

孔雀舞衣装(中国)

■関連イベント
「みんぱくでバードウォッチング！」

マップをもとに、展示場にいる「とり」を探します。マップに掲載のクイズに解答された方には、参加賞を贈呈します。

日時　2017年1月9日(月・祝)
　　10時～17時(16時受付終了)
受付場所　本館エントランスホール
会場　本館展示場
※当日随時受付、先着350名、参加無料(当日は無料観覧日です)

ギャラリートーク

日時　2017年1月9日(月・祝)
　①11時～11時30分
　②14時30分～15時
会場　本館ナビひろば
講師　卯田宗平(本館 准教授)
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日です)

アイヌ展示チアシリカラ！(アイヌの展示をリニューアルしました) ――冬のみんぱくフォーラム2017

工芸、音楽などさまざまな分野で、伝統をベースにしつつ新しいアイヌ文化が生まれています。伝統を継承しながら、新たな文化を創造する人びとの姿を、イベントをとおして紹介します。

■関連イベント
トンコリ×ウポポ ――アイヌ音楽ライブ by OKI／MAREWREW

日時　2017年1月29日(日)
　　14時～15時30分(13時20分開場)
会場　本館講堂(定員450名)
出演　OKI(オキ)
　　MAREWREW(マレウレウ)
司会　齋藤玲子(本館 准教授)
※要事前申込、参加無料(要展示観覧券)

アイヌ・アートにふれる日～木彫の可能性～

日時　2017年2月4日(土)、5日(日)
　　11時～16時
会場　本館エントランスホール
作家　貝澤 徹(木彫家／北の工房 つとむ)
　　藤戸康平(木彫家／熊の家・藤戸)
※申込不要、参加無料

展示場クイズ「みんぱQ」 アイヌの文化編

12月15日(木)～2017年1月24日(火)

みんぱく映画会 第35回ワールド・シネマ「パレードへようこそ」

1984年サッチャー政権下のイギリスを舞台に、ストライキを敢行する炭坑労働者と、彼らを支援するゲイグループが、理解しあい結束するまでを描いたイギリス映画を上映します。

日時　12月4日(日)
　　13時30分～16時30分(13時開場)
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
※入場整理券を当日11時から本館2階観覧券売場にて配布

連続講座 「みんぱく×ナレッジキャピタル ――展示キュレーションの誘惑 ――新しいみんぱくの展示ができるまで」

本館の研究者が、展示という作業の醍醐味と魅力についてお話しし、展示キュレーションの世界へ誘います(全7回)。

時間　19時～20時30分
会場　グランフロント大阪北館1階
　　ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催　国立民族学博物館
　　一般社団法人ナレッジキャピタル

12月8日(木)
展示キュレーションの誘惑 ――新しいアイヌの文化展示ができるまで
講師　齋藤玲子(本館 准教授)

12月21日(水)
展示キュレーションの誘惑 ――新しい日本の文化展示ができるまで
講師　日高真吾(本館 准教授)

お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

●休館日、無料観覧日のお知らせ

年末年始は12月28日(水)～1月4日(水)まで休館します。1月9日(月・祝)成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

巡回展「ワンロード ――現代アボリジニ・アートの世界」

会期　2017年1月9日(月・祝)まで
主催　市原湖畔美術館(指定管理者：株式会社アートフロントギャラリー)
休館日　月曜日(祝日の場合は翌日)
会場　市原湖畔美術館

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時(13時開場)
会場　本館講堂
定員　450名(当日先着順)
参加費　無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

第463回　12月17日(土)
アイヌ語はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか。

講師　中川裕(千葉大学 教授)
　　齋藤玲子(本館 准教授)

千葉大学のウェブサイトで公開中のアイヌ語教材

アイヌ語と日本語の歴史的な関係や、どの言語と似ているのかなどについて解説するとともに、現在の保存・継承の取り組みや将来への展望をお話しします。新展示で見る・聞くことのできるアイヌ語も紹介します。

※当日11時30分～12時、アイヌの文化展示場案内を開催(要展示観覧券)

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
ただし、11日(日)、25日(日)は展示観覧券不要

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

12月11日(日) 14時30分～15時　本館第3セミナー室
民族音楽学の考え方
話者　寺田吉孝(本館 教授)

12月18日(日) 14時30分～15時15分
本館第5セミナー室→アイヌの文化展示場
先住民アート――アイヌとカナダ先住民の比較
話者　岸上伸啓(本館 教授)

12月25日(日) 14時30分～15時15分
本館第3セミナー室
みんぱくの資料をあつめてみよう―データベースを活用した仮想展示のつくり方―
話者　丸川雄三(本館 准教授)

刊行物紹介

■園田直子 編
New Horizons for Asian Museums and Museology　邦題：アジアにおける博物館・博物館学の新しい展開

Springer Singapore

本書では、日本、タイ、ミャンマー、モンゴルなどの事例から、それぞれの歴史的・社会的・文化的背景のもとに発展し、成熟するアジアの博物館の「いま」を明らかにする。海外に向けた発信が少なかったアジアの博物館・博物館学の現状をひろく紹介することで、博物館研究に新たな切り口をひらく。

■西尾哲夫、水野信男 編著
『中東世界の音楽文化――うまれかわる伝統』　スタイルノート　3,600円(税抜)

イスラム文化圏に属する中東世界は人類最古の文明発祥地をかかえ、世界の音楽文化の根源と基底をかたちづくってきた。

本書では、「繋ぐ」、「継ぐ」、「紡ぐ」、「創る」という4つのキーワードから、音楽文化が、中東と西洋を舞台に互いに越境しあい、縦横に行き来し、展開し、深化しつづけている実態を分析し論じている。

■陳天璽、大西広之、小森宏美、佐々木てる 編著
『パスポート学』
北海道大学出版会　3,200円(税抜)

本邦初、「パスポート」についてとことん追究する書。日本からの出国者はみな、パスポートないしそれに代わるものを使って国外に出て、帰国時にも同様の手続きを行う。それはもはや日常的な風景かもしれないが、なぜそうした手続きが必要なのか、そして国を出入りすることにはどんな意味があるのか。本書はこの根本的な問いに答え、パスポートについて体系的に考える手がかりを提供する。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

新「アイヌの文化」展示関連講演会

2016年6月にリニューアルオープンしたアイヌの文化展示では「現代、そして未来」というセクションを設け、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する姿を紹介しています。本講演会では新しくなった展示の見どころを紹介するとともに、関西・関東でアイヌ文化の普及・継承活動に携わるお二人をゲストに迎えて、近年の取り組みとそれに対する思いを語っていただきます。

第462回友の会講演会(大阪)

2017年1月7日(土)13時30分～14時40分
アイヌ文化を楽しく学ぶ――関西での活動を例に
ゲスト　藤戸ひろ子(ミナミナの会代表)
講師　齋藤玲子(本館 准教授)
大阪を拠点に展開する、手仕事や芸能など「体験」を重視した活動を紹介します。
会場　本館第5セミナー室
※当日受付、会員証提示(会員外500円)

第116回東京講演会

2017年1月9日(月・祝)13時30分～14時40分
「アイヌ・アート」をもっと身近に ――イラストレーションから踊りまで
ゲスト　小笠原小夜(アイヌ文化交流センター非常勤職員、イラストレーター)
講師　齋藤玲子(本館 准教授)
伝統をふまえつつ、あらたな表現方法に挑戦する、作家／アーティストたちの活動などについて紹介します。
会場　アイヌ文化交流センター(定員60名)
※要事前申込、無料「会員は会員証提示」
●両講演会とも終了後、解説付きの見学会をおこないます。

第463回友の会講演会(大阪)

2017年2月4日(土)13時30分～14時40分
【現代中東地域研究推進事業拠点設置関連】
世界各地のイスラーム ――みんぱくでその広がりを考える
講師　山中由里子(本館 准教授)
会場　本館第5セミナー室
※当日受付、会員証提示(会員外500円)
●講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます。

味の根っこ

ペルー風ドーナツ

ピカロン

八木 百合子（やぎ ゆりこ）　民博 機関研究員

シロップのかかったピカロン。一皿4〜5個が一人前である

午後のおやつ

首都リマの旧市街地の一角。ここに、数々の奇跡を起こすことで有名な「奇跡のキリスト（セニョール・デ・ロス・ミラグロス）」を祀るナサレナス教会がある。礼拝にやってくる信者が絶えず行き交う教会周辺には、とくに週末の午後になると人びとの小腹を満たす屋台が立ち並ぶ。なかでも人気なのが、「ピカロン」というお菓子である。

まるい輪っか状の揚げ菓子は、どこにでもあるドーナツのようにも見えるが、その製法はペルーならではのスタイルである。生地にはカモテという名の橙色（だいだいいろ）のサツマイモとカボチャが練り込まれているのだ。小麦粉だけで作るドーナツよりもふっくら柔らかい食感が特徴である。卵や牛乳を加えたりする場合もあるが、弾力性のある生地にするのがふんわりと仕上げるためのコツである。そして、ふわふわに揚がったピカロンに黒糖で作った特製シロップをたっぷりと浸み込ませて食べるのが、甘いもの好きのペルー人の流儀である。素朴なレシピから、今やペルーでもっとも親しまれているおやつのひとつである。リマに限らず、全国各地のお祭りの出店でもおなじみの一品になっている。

新旧両大陸の融合

ピカロンがペルーに登場したのは三〇〇年以上も前の植民地時代に遡る。一説によれば、スペインのブニュエロという揚げ菓子に起源があるといわれるが、それも古くはレコンキスタ以前にイベリア半島に住んでいたイスラーム教徒が食していたお菓子だと伝えられる。新大陸へは、一六世紀にペルーを征服し、海岸部のリマに首都を築いたスペイン人がもたらした。彼ら白人が食べていたのがピカロンの原型である。それがやがて労働力として連れて来られた黒人奴隷やその子孫であるムラートのあいだにも広まっていったという。その過程で、小麦粉に代わるあらたな材料として黒人たちが取り入れていったのが、新大陸起源のサツマイモとカボチャである。こうして今のペルーのピカロンが誕生した。まさに新旧両大陸の文化が融合してできたスイーツである。

ピカロンを売る女性。揚げたピカロンには特製黒糖シロップを注ぐ

ピカロンの発祥の地として知られるナサレナス教会周辺の一帯は、もともと首都のなかでも黒人が多く居住する地域だった。新大陸へ連れて来られた黒人のうち、女性たちは白人の邸宅の台所をあずかるようになった。白人に仕えながらも、黒人たちがそこで手にするさまざまな材料や知識を使って生み出したペルー料理は数知れない。ペルー料理の代表格アンティクーチョ（牛の心臓の串焼き）も、白人が食さず廃棄していた内臓部分を利用して、黒人たちが編み出した料理のひとつである。そしてむかしからこの地域で、アンティクーチョと並んで売られてきたのがピカロンである。今は屋台を引いて、揚げたてのピカロンをその場で売るのが主流だが、かつてはピカロネラという名でよばれた売り子が、シロップの入ったポットとピカロンを積んだ籠を頭にのせて教会の周辺で売り回る姿があったという。

屋台で販売するピカロンを買いに来る人。一皿 5 ソル（約 150 円）

聖地名物

ナサレナス教会は今日、ペルーでもっとも多くの人が集う聖地のひとつである。ここに祀られる奇跡のキリスト像は「褐色のキリスト」ともよばれ、一七世紀にこの地へ渡ったひとりの黒人奴隷が日干し煉瓦（れんが）の壁に描いたものである。かつてこの地域に住んでいた黒人を中心に栄えた信仰であったが、その壁がリマを襲った大地震の際にも崩れなかったことで一躍有名になった。今や、国民的な信仰に発展している。祭典がおこなわれる一〇月には、全国から大勢の人が聖地を訪れる。甘く香ばしい匂いに誘われた巡礼者たちは、ピカロンの屋台の前で足を止め一休みをする。そして、これと併せて彼らが聖地土産として必ずといっていいほど購入するのがトゥロンという焼き菓子である。ドニャ・ペパ（ペパおばさん）という黒人女性が商標になっているこの名菓もまた、黒人の創意によるとても甘いお菓子である。お伊勢参りのあんころ餅をはじめ、日本の寺社の門前町に和菓子店や甘味処がつきもののように、古今東西、聖地を参った人びとに疲れを癒す甘いお菓子は不可欠なようである。

聖地名菓のトゥロンを売る店。黒人女性のドニャ・ペパが商標になっている

ピカロン（10 人前）

小麦粉	500g
カボチャ	250g
カモテ（サツマイモ）	250g
イースト	25g
アニスシード	大さじ 1
砂糖	大さじ 2
塩	少々
〈シロップ〉	
黒糖	カップ 2
水	カップ 3
シナモン	1 本
オレンジの皮	ひとかけ

① 切って皮をむいた状態のカボチャとカモテに水とアニスシードを加えて茹でる。柔らかくなったら火を止め、冷めたところでミキサーにかけペースト状にする。

② ボウルに小麦粉、水、イースト、砂糖、塩を入れ、①のペーストを加えてよく混ぜた後、しばらくおいて発酵させる。

③ 生地を手にとり円形に形をととのえながら熱した揚げ油の中に入れて、色がつくまで揚げる。

④ 鍋に黒砂糖を入れ火にかけ水を加えながら、中身が溶けたところで、シナモンとオレンジの皮などで香りづけをしてシロップを作る。

⑤ 揚げたてのピカロンにシロップをたっぷりかけてできあがり。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

「東西文化の交流点」で
――ロシア連邦ボルガル遺跡を巡るポリティクス

櫻間瑛（さくらま あきら）
日本学術振興会特別研究員PD

ヴォルガ河沿岸の古都ボルガル。その遺跡は、ロシアのイスラーム聖地とされる一方、キリスト教との共存も強調されている。しかし、近年の文化遺産保護運動は、その矛盾を明らかにするものとなっている。

世界遺産ボルガル

二〇一四年、ユネスコ世界遺産委員会により、ロシア国内二六番目の世界遺産として、ヴォルガ河とカマ河の合流点付近に位置する「ボルガルの歴史的考古学的遺産群」の記載が決定された。

ボルガルは、一〇世紀にヴォルガ沿岸地域に繁栄したヴォルガ・ブルガル国家の首都で、東西交易の中継点として栄えた。ここには、中東地域からの使節も往来し、北方ユーラシアで最初のイスラーム国家となった。その後、モンゴル軍の征服を受けるが、一三世紀に成立したジョチ・ウルスの最初の首都となり、引き続き東西交流の中心地として機能し続けていた。

ボルガルから眺めるヴォルガ河（撮影・松本路朗）

世界遺産の認定に当たって評価されたのは、この東西文化の接点、地域の最初のイスラーム拠点だったことである。同時に、現在この地域に居住しているタタールの聖地としても、この遺跡は認識されている。

タタールとは、言語的にはトルコ人に近いテュルク系民族で、その大半はスンニ派のムスリムである。現在ロシア国内には約五〇〇万人が居住しており、最大の少数民族として、大きな存在感を示している。タタールの名を冠するタタルスタン共和国は、ロシア連邦内でも傑出した民族自治共和国として、タタール語やタタール文化の復興に力を入れている。ボルガルの世界遺産申請も、このタタルスタン共和国が主導した。

現代のタタールとボルガル復興

現代のボルガルのターニングポイントとなったのが一九八九年である。無神論を標榜（ひょうぼう）したソ連の崩壊を間近に、タタールのあいだでムスリムとしての意識が高まるなか、「聖ボルガルの集い」がおこなわれた。これは、ヴォルガ・ブルガル国家のイスラーム受容一一〇〇周年（イスラーム歴換算）にちなんでおり、イスラーム受容の聖地としてボルガルで集団礼拝をおこなったのである。ボルガルには、宣教に来たムハンマドの弟子が埋葬されたという伝説があり、それにあやかって巡礼に訪れるという習慣がある。「集い」は、この習慣にもちなんで、以降毎年実施されるようになった。

その後、この遺跡の復旧・発掘調査も活発になった。そして、二〇一〇年にはタタルスタン初代大統領のシャイミエフにより、「復興基金」が設立され、タタール民族の故地としてボルガルの修復・開発が積極的に推進され、世界遺産の認定も目標に掲げられた。この事業では、敷地周辺に博物館や新しいモスクの建設も進められた。

一方、現在のタタルスタンでは、イスラームがロシア正教と共存してきたということがしばしば強調されている。二〇〇〇年に世界遺産として認定された、共和国の中心都市カザンにあるカザン・クレムリンには、こうした宗教共存の象徴として、ロシア正教の聖堂とイスラームのモスクが並び立っている。

ボルガルも、その敷地内に帝政期に建てられた教会跡地とミナレットが並んでおり、両宗教の共存が示唆されている。また、ボルガル開発に当たっては、地域のロシア正教の中心であるスヴィヤシスク島の開発も並行して進めることで、やはり両宗教への配慮を示している。

新設されたホワイト・モスク（撮影・松本路朗）

遺産復興の影

ボルガルの復旧・開発は、基本的に好意的に受け止められている。インフラ・施設整備、世界遺産化による知名度の上昇により、観光客の数も増加し、経済的な利益ももたらしている。

しかし、この大規模な開発事業に対しては、多くの批判も寄せられている。世界遺産の審議に当たっては、周辺施設の整備などに対して、景観を破壊しているとの指摘が相次いだ。遺跡の修復自体についても、再建されたミナレットの真正性に関して疑義が表明されるなど、問題が指摘されている。

また、タタールの民族主義者からは、観光開発に対して、「聖なるボルガルを汚すもの」という声もあがっている。さらに、スヴィヤシスク島の開発について、ここがかつての改宗政策の中心だったことから、自分たちの歴史に対する裏切りとして、反発も出ている。

敷地内のミナレットと教会跡（撮影・松本路朗）

ボルガル遺跡は、地域のイスラームの歴史、キリスト教との共存のシンボルとされている。しかし、その復興事業は、歴史の再現・宗教共存の困難を顕在化させるものともなっているのである。

インドの「ハンディクラフト」

インドでは独立後、手工芸開発が重視され、今では職人たちを讃えるナショナル・アワードという報奨制度も作られた。国家レベルで評価することで文化的価値、美的価値を守り、ひとつの大きな産業として発展させていく。

金谷（かねたに） 美和（みわ）
民博 外来研究員

2011年度ナショナル・アワードを両面木板捺染アジュラクのサリーで受賞したアーダム・J・カトリー氏の授賞式の様子。
写真提供・アーダム・J・カトリー

「ハンディクラフト」は行政用語

日本語の「手芸」を英語に訳すと、「ハンディクラフト」だという。では、このことばは、他の国ではどのような意味をもって使われているのだろうか。インドでは、英語のハンディクラフトということばは、手仕事によって作られたものを指す用語として使われている。英語なのは、行政用語として使われていることばだからだ。インドは多言語国家であり、中央行政における使用言語は英語とヒンディー語と定められている。ちなみにハンディクラフトのヒンディー語はハスタシルプという。

インドのハンディクラフト行政は、一九五二年にはじまる。一九四七年に英国の植民地支配から独立した後、農村経済の発展のために小規模産業の重点化がうたわれたが、これが後のハンディクラフト・ディベロップメント、つまり手工芸開発につながる施策となった。対象になっているのは専業の職人が作る金工、宝飾品、木工、絵画、染織、編組、土器・陶器、玩具のほか、女性の手仕事である刺繍（ししゅう）やアプリケも含まれる。

文化ではなく、経済

行政のみならず、農村開発に関心をもつNGOもハンディクラフトの生産者の支援をおこなったり、あるいはハンディクラフトを媒体とした開発に携わったりするようになった。ハンディクラフトが開発にかかわる?と不思議に思う人もいるかもしれない。インドでは、ハンディクラフトは経済の問題としてとりくまれているのである。

ハンディクラフト行政の初代の責任者であったチャットパディヤイーは、「ハンディクラフトにかかわる問題にとりくむためには、ハンディクラフトを文化ではなく、経済の問題として考えなければなりません」と述べている。

経済学者によると、ハンディクラフトの生産者はインド全国におよそ八四〇万人（一九九四ー九五年）いると推計されており、インドの輸出品に占めるハンディクラフトの割合は少なくなく、経済的に重要であるという。

しかし経済的価値に重きをおいているからといって、ハンディクラフトのもつ文化的価値や美的価値が軽視されているわけでは決してない。ハンディクラフトの生産を担っている職人たちが、その仕事で食べていくことができなければ、その産業は先細りになり、職人が担っていた在来技法に関する知識や、職人がもっていた伝統的デザインといった膨大な文化資源が失われることになってしまう。職人たちが生業として持続的にハンディクラフトに携われるようにすることが、結果的には文化を守ることにつながるのである。

変化する職人

行政がおこなっている施策のうち、代表的なものにナショナル・アワードという報奨制度がある。毎年、二〇人のハンディクラフトの生産者が表彰される。授賞式は首都デリーで執りおこなわれ、記念品の楯（たて）が、大統領により手ずから贈られる。このことは、職人にとっては大きな名誉である。インドのハンディクラフトは、もともとは生活や儀礼に用いられる実用品であり、その生産には職人カーストが携わってきた。カースト制度のなかで社会的にも経済的にも低位に位置付けられてきた職人カーストや、周縁化されてきた女性の生産者が脚光を浴び、国家レベルで評価をうけることは、彼ら自身の仕事に自尊心を感じさせる機会となり、生業を継続させる動機となっている。

展示即売会にて販売中の生産者。2016年首都デリーで開催されたイベントにて

展示即売会も、行政が重視している施策のひとつである。職人が都市で開催されるイベント会場にでむき、客にハンディクラフト商品を直接販売するのである。ときには制作工程を客に見せたり、説明したりすることもおこなう。職人が自ら市場とつながり、客の好みを反映した商品とはどういうものかを学ぶための場と位置付けられている。インドにおいても、ハンディクラフトが地域社会のなかで日常生活を支える衣食住の道具として作られ、使われていたようなありかたはすでに失われつつある。職人は、国内市場や、さらにはグローバル市場に対応したハンディクラフト生産に転換することを求められているのである。

首都デリーの国立手工芸博物館において、展示即売会をおこなっている女性の陶工。
客の前で、ろくろを回しながら制作工程を見せている。2014年撮影

「ラフラン諸島」ってどこ?

What's in a name?

山本 泰則（やまもと やすのり） 民博 文化資源研究センター

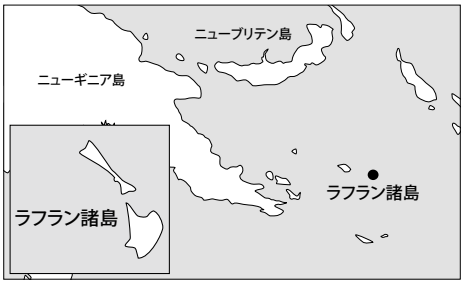
今から三年ほど前に、「ジョージ・ブラウン・コレクション」の標本資料について、収集地を地図にプロットしてみたことがある。このコレクションは、宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウンが、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて南太平洋の島々で収集した約三〇〇〇点の民族誌資料である。現在、民博に収蔵され、資料情報のデータベースも一般公開されている。

収集地を地図にプロットするには、地名の緯度経度が必要である。情報を整理してみると、異なる地名は一二四種類に絞りこめた。ローカルな地名やあいまいな表記が少なくなかったため、緯度経度の調査はひとつひとつ手作業でやらざるを得なかった。

位置の特定にもっとも苦労した地名のひとつに、「ラフラン諸島」があった。収集地情報は、「ニューギニア ラフラン諸島」としか書かれていない。「ラフラン」は洋梨の「ラ・フランス」（La France）ではなく、綴（つづ）りはLaughlin（または、Laughlan）である。

まずは定番のGoogle MapsやGoogle Earth、地名のWikipedia的存在のGeoNames、地図帳などをあたってみたが場所はわからない。インターネットを検索すると、旅行ガイドをはじめとしてLaughlin Islandsという文字を含むページが写真入りでたくさん見つかるのだが、肝心の位置がわからない。また、「国立国会図書館デジタルコレクション」のなかの「ニウギニア面積人口表」（南洋経済研究所、昭一九）という文献にも行き当たった。その二三ページには、ラフラン諸島は「ムルア島東方四〇浬（かいり）の地点（ち）に位し、……」と書かれていたが、正確な位置はしるされていなかった。ともかく、ラフラン諸島は幻の島々ではなさそうだ。

そうこうするうちに、偶然ある文献をウェブで見つけた。題名は"Report of Investigation of Islands in the Territory of Papua and New Guinea Phosphate Survey, 1958"。オーストラリア政府の鉱物資源にかかわる機関の調査報告書で、一九五八年発行だった。その本文に、ラフラン諸島の位置は東経一五三度四〇分、南緯九度一八分としるされており、付録の地図にはラフラン諸島がはっきりと記載されていた。Google Mapsを見ると、その場所にラフラン諸島の文字はなかったが、ふたつの島が確認できた。



やっと一件落着。地名の位置を調べるのに、定石はないともいえるが、ウェブを探せばなんとかなる時代になったのだと実感したできごとだった。

月刊みんぱく 2016 12月号

編集後記

本特集を注意深く読まれた方は映像の「制作」と「製作」の両方が使われていることにお気づきかもしれない。梅棹先生は「映画製作」という表現を使っておられ、今の『国立民族学博物館展示ガイド』でも「民博製作のオリジナル映像」という表現が見られる。一方で、『広辞苑』第六版では「制作」の定義が「美術作品や映画・放送番組・レコードなどをつくること。また、その作品。」となっている。さらに調べると、映像業界では独特の用法があるようで、みんぱくのビデオテーク作品のエンドロールでも微妙な使いわけがされている。不統一が校正漏れでないことだけ、指摘しておこう。

映像といえば、ドイツのケルン市にあるラウテンシュトラウフ・ヨスト博物館（通称「世界文化博物館（ヴェルトクルトゥーレン・ムーゼウム）」）で10月7日に開幕した「巡礼――幸せを求めて」という特別展に、大森康宏名誉教授が監修した四国巡礼の映像が使われている。少しばかりお手伝いしたので、開幕式に行ってきた。みんぱくのビデオテーク作品制作に多大な貢献をされた井ノ本清和氏がカメラを回した映像が海外の展覧会でも活かされている様子を、井ノ本氏本人に報告することができないうちに急逝されたのが、残念でならない。

最後になりましたが、来年の1月号から編集長が交代します。イクメン編集長の丹羽さんに乞うご期待！（山中由里子）

●表紙：『Room 11, Ethiopia Hotel』（川瀬慈監督作品、2006年）より

次号の予告

特集

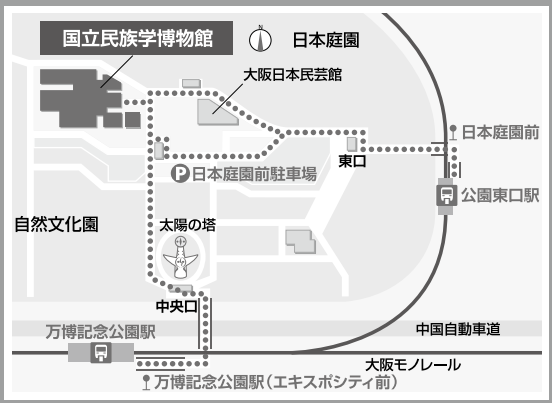
とり

月刊みんぱく 2016年12月号
第40巻第12号通巻第471号　2016年12月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子
丹羽典生　南真木人　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

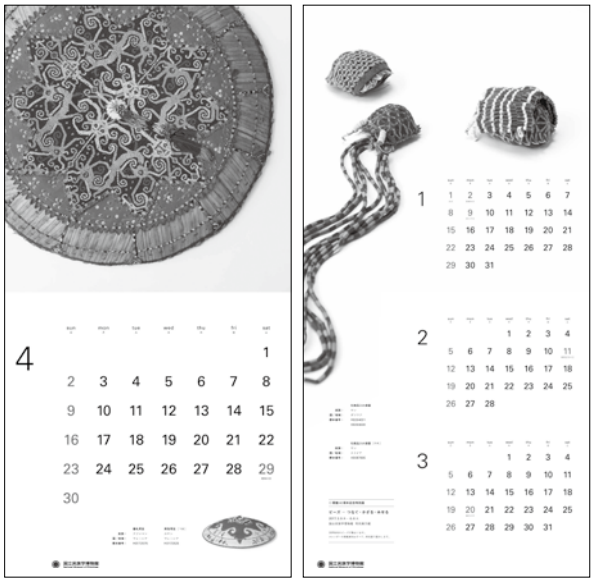
みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

ビーズがつなぐ毎日。

来年3月より開幕する開館40周年記念特別展「ビーズ――つなぐ・かざる・みせる」。2017年度の国立民族学博物館オリジナルカレンダーは、その展示資料から選びました。

ビーズはガラス、石、動物の歯など、あらゆる素材で作られ、身体を装飾するだけでなく、儀礼に使用したり、社会的地位や豊かさを示すものとしても活用されてきました。世界中で親しまれている、魅力あふれるビーズの世界を、1年を通してお楽しみください。



2017年1～3月（見開き）もついています

2017 年度国立民族学博物館オリジナルカレンダー

BEADS

定価 1,620 円

国立民族学博物館友の会会員価格 1,458 円

見開きサイズ　59.0㎝× 29.5㎝

オールカラー　28 頁中綴じ

※ 2017 年 4 月～ 2018 年 3 月までのカレンダーです

※ 5 冊以上まとめてのご購入の場合、1 冊 1,296 円

※通信販売の場合、別途発送手数料が必要です

お問い合わせ先

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112　FAX:06-6878-8421
e-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休

オンラインショップ「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

※価格は全て税込です

みんぱくをもっと楽しみたい人のために――――会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00 ～ 17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。